

〈訳注〉

タキー・アッディーン・アリー・ブン・アビー・バクル・ハラウィー著

『ハラウィーの戦略論』訳注（２）

谷 口 淳 一

[M: 80; S: 12]

第13章 資金・備蓄品・武器の集積および臣民と兵員の心の収攬¹⁾

スルターンには、諸部門、諸方面から資金を集め、備蓄品を多くしておくことが望まれる。諸王にとっての資金は、世界における太陽のようなものである。それが多ければ、持ち主を強くし、少なければ彼を弱くする。

スルターンは、人々の状況に即して、またその立場に応じて、彼らを厚遇し恩恵を与えることで、人々の心を惹きつけなくてはならない。人々の心は、天空の世界（‘alam al-ğaww）を飛ぶ鳥たちのようなものであるから。罟と網を仕掛け穀物とパンを撒き²⁾、それらが落ちて罟にかかったならば、逃げおおせるとは思えぬようにする以外には、捕らえることができない。同様に、人々の心は、飛ぶ鳥たちのようなものであり、厚遇や喜びを与えなければ惹きつけられず、惹きつけたとしても素早く逃げてしまうものである。諸王の吝嗇は、彼らに対する民衆の流言蜚語の

* 本稿は『ハラウィーの戦略論』（*al-Taḡkira al-Harawīya fī al-ḥiyāl al-ḥarbīya*）第13章～第20章 [S: 12 – 19] の日本語訳注である。原典と著者、訳注作成の方針などについては、「ハラウィーの戦略論（１）」1頁（訳者まえがき）を参照されたい。

- 1) 資金・備蓄品・武器の集積および臣民と兵員の心の収攬 (ğam’ al-māl wa al-daḥā’ir wa ālat al-ḥarb wa istimālat qulūb al-ra’īya wa al-riğāl al-ḥarbīya)。冒頭の目次では、al-ra’īya wa (臣民と)の部分が欠けている。
- 2) 穀物とパンを撒き (baḍr al-ḥabb wa al-širāk)。Sourdel-Thomineは、辞書では確認できない意味と断ったうえで、širākを filets (網)と訳している [S: 227, n. 1]。ほとんどの辞書は širāk の語義を「靴紐」としているが、Steingass は allowance of food (食糧割り当て) という意味も記している [Steingass A: 535]。また、今日のシリアやレバノンには、ḥubz al-sāğ と呼ばれる円形の非常に薄いパンがあり、アレppoなど北シリアにおいてはこの名称が用いられているが [平田昌弘2022: 179 – 180, 322 – 324頁]、ḥubz al-širāk とも呼ばれている。文脈を考えると、ここでは širāk はパンを意味している可能性が高いと思われる。

増大をもたらすことを知るように。したがって、吝嗇に用心するように。たとえ気前のよさが天性のものでなかったとしても、自分の家を守り、王権を確固としたものとするために、不承不承であっても気前よく振る舞うように。

スルターンは、臣民と兵員の賃金の状況³⁾と、彼らの俸給のうち彼らに支払われるべきものを届けることに注意を払い、彼らを待たせないようにすべきである。さもなくば、彼らを弱らせ、スルターンに対して憤らせてしまう。[M: 81] そうなると、彼らを必要とするときに、彼らはスルターンを見放すことになる。また、技術兵(ṣunnā')と部隊長たち(muqaddamūn)、すなわち敷設兵(mi'mārīya)、投石機操作兵⁴⁾、弩射兵⁵⁾、火炎放射兵⁶⁾、楯保持兵⁷⁾、[M: 82; S: 13] 対壕兵(naqqābūn)といった者たちのことを疎かにしないこと。

スルターンは、兵器庫とそこにあるものを査察しなくてはならない。すなわち、剣、槍、胴鎧⁸⁾、鎖帷子(zarad)、楯⁹⁾、諸道具('udad)、鳳型平底楯¹⁰⁾、薄片鎧¹¹⁾、防御柵¹²⁾、[M: 83] 上質の鳳型楯¹³⁾、槍先(hirāb)、弓、弓弦、弩¹⁴⁾、弩架台¹⁵⁾、矢¹⁶⁾、撒菱¹⁷⁾、破城槌¹⁸⁾、[M: 84] 戦闘用鉤繩¹⁹⁾、

3) 臣民と兵員の賃金の状況(hāl al-ra'īya wa al-riḡāl al-naqdiya)。Sourdcl-Thomineは、naqdiyaの意味は不詳と注記している[S: 227, n. 2]。しかし、この語は、「金銭の」という意味の形容詞naqdīが、hāl(状況)を修飾しているために女性形の語尾が付されていると考えれば、問題なく解釈できる。hālは両性どちらにもなり得る名詞であり、ここでは女性名詞として扱われていると考えられる。

4) 投石機操作兵(maḡḡanīqīya)。投石機(maḡḡanīq)とは、石などの弾丸を投擲する攻城兵器である[“mandjanīk,” EI 2]。

5) 弩射兵(ḡarḡīya)。弩(ḡarḡ)については、注14を参照のこと。

6) 火炎放射兵(zarrāqūn) [M: 81, n. 3; Dozy, v. 1: 588]。

7) 楯保持兵(tarrāsa)。Sourdcl-Thomineは、porteurs de boucliersと訳している[S: 227]。M本はtarasaと読むが、同様の意味に解している[M: 81, n. 4]。両者の解釈に従って訳した。

8) 胴鎧(kabūra)。重量のある形式の胴鎧(heavy form of cuirass) [EI 2, v. 12: 740]。鉄製の胴鎧を意味するペルシア語のkabr [Steingass P: 1012] に由来する語と考えられる。

9) 楯(tirās)。円形の楯を意味するtursの複数形。この楯は、直径65-75cm程度の木(合板)製が一般的であった[Nicollé 1982, v. 1: 229]。

10) 鳳型平底楯(ḡanawīyāt)。鳳型で底辺が平らな楯を意味するḡanawīyaの複数形 [EI 2, v. 12: 740]。

11) 薄片鎧(ḡawāšin)。鉄薄片製の胴鎧を意味するḡawšanの複数形 [M: 82, n. 6; EI 2, v. 12: 740]。

投石機および小型投石機²⁰⁾ 用木材、麻綱、必要とされるあらゆる武器、大量の大きな石と小さな掌大の石²¹⁾、鉄輪²²⁾、釘、ピッチと [M: 85] タール²³⁾、石灰 (kils)、水牛・駱駝・牛・羚羊 (aw'al) の皮革、ナフトとその装置²⁴⁾、鍋とそれに必要なもの²⁵⁾である。

穀物庫とその中にある小麦、大麦、レンズ豆、ガラス豆などの穀物ならびに切藁庫 (buyūt al-atbān) に留意するように。また、倉庫とその

-
- 12) 防御柵。原語の読み方には異同があり、Sourdel-Thomine は *gaftayyāt*、al-Murābiṭ は *guftiyāt* と読んでいるが、*Dozy* には *ḡafatīyāt* とある。いずれも複数形で、単数形は *ḡafta* または *ḡaftā* である [M: 82, n. 7; S: 227, n. 7; *Dozy*, v. 1: 200]。
- 13) 上質の鳳型楯 (*ḡiyād tawāriq*)。 *tawāriq* は、 *tāriqa* (縦長で底辺が尖っている楯) の複数形 [M: 83, n. 1; EI 2, v. 12: 742]。
- 14) 弩 (*ḡurūḥ*)。原文は複数。単数形は *ḡarḥ*。ペルシア語の *čarḥ* (輪) に由来する語で、車輪を回転させて弓を引くことによって、檣のように長大な矢を遠くまで飛ばす兵器を意味する [M: 81, n. 2; *Dozy*, v. 1: 182; EI 2, Index: 223]。本書では弩とその架台が分けて記されているが、架台付き弩 (*qaws al-ziyār*) という名称の兵器もみられる [アルハサンほか 1999: 137–138頁]。
- 15) 弩架台 (*ziyārāt*)。原文は複数。単数形は *ziyār*。 *Dozy* に引用されている文例には「一つのズィヤールに三つの弩」とあり、複数の弩を設置する架台もあったようである [*Dozy*, v. 1: 618]。
- 16) 矢 (*nabl*)。Sourdel は *carreaux d'arbalètes* (弩の矢) と訳している [S: 228]。
- 17) 撒菱 (*ḥasak*)。原義は棘ないし魚の小骨であるが、ここでは敵軍の馬の進行を妨害するために地面に撒く鉄片または枝付きの木の破片を指す [M: 83, n. 5]。
- 18) 破城槌 (*ālat al-nuqūb*)。城壁や城門を破壊するために用いる木材と鉄で作られた柱状の兵器 [M: 83–84, n. 6]。
- 19) 戦闘用鉤繩 (*kalālīb li-l-ḥurūb*)。原文は複数。先端に *kullāb* (鉤) を取り付けた鎖または綱あるいは縄梯子で、壁を登る際などに用いる [M: 84, n. 1]。
- 20) 小型投石機 (*ʿarrādāt*)。原文は複数。単数形は *ʿarrāda*。この投石機はラクダに載せて運搬することができた [M: 84, n. 3]。
- 21) 掌大の石 (*kaffiyāt*)。原文は複数。単数形は *kaffiya* [M: 84, n. 5]。
- 22) 鉄輪 (*ḥalaq*)。鎖帷子などに用いる金属製の輪 [M: 84, n. 6; EI 2, v. 12: 740]。
- 23) ピッチとタール (*al-zift wa al-qār*)。 *zift* と *qār* は、いずれもピッチあるいはタールのような物質を意味する語であり、ここでの意味の違いは不明である。同義語として併記されている可能性もある。
- 24) ナフトとその装置 (*al-naft wa ālat-hu*)。 *naft* は、石油ないし石油を成分に含む物質を指す語であるが、ここでは、軍事用の焼夷性物質を意味していると考えられる。したがって、ナフトとその装置とは、いわゆる「ギリシア火」として知られる焼夷性物質とその発射装置と考えられる [アルハサンほか 1999: 142–144頁; “naft,” EI 2]。
- 25) 鍋とそれに必要なもの (*al-quḍūr wa ḥawāʾiḡ-hā*)。原文は複数。 *quḍr* は調理用の鍋を意味する語であるが、ここでは油を加熱して敵兵に注ぐというような兵器としての利用も想定されていると考えられる [M: 85, n. 5]。

中にある塩、液状バター (asmān)、油脂 (al-zuyūt wa al-adhān)、大量の獣脂 (ṣuhūm)、塩漬けし乾燥させた肉と肝臓²⁶⁾、[M: 86] 解体された各部位に留意するように。無知な者たちが「[以上のような] 言ったこと、述べたこと、記録したこと、書き記したこと、何度も述べたことに何の必要があるのか」と言うかもしれない。しかし、我々は、砦は近寄り難く強固で、戦いぶりは力強かったが、塩が欠乏すると砦を棄て降伏し²⁷⁾ 砦を出て明け渡した者たちを見たことがある。それはタバリーヤ²⁸⁾ の近くにあるカウカブ砦²⁹⁾ のことである。[M: 87]

第14章 敵との対戦、布陣と戦術的特質³⁰⁾

不信仰者である敵が向かって来ているという情報が入り、彼に対戦する力がスルターンにあるとわかっている場合は、対戦に集中するように。軍隊および動員された者たちを伴い、すみやかに自国から出陣するように。諸情報を明らかにするために、信頼の置ける諜報員を先発させるように。それはまた、[戦場へ] 向かったときにどこに布陣するかを知っておき、[情報がなく] 困惑したままで偶然〔至った場所〕に布陣することがないように、布陣場所を選定しておくためでもある。さもなくば、水と馬糧が少ない土地に布陣してしまうかもしれない。そこで敵に包囲されれば、破滅してしまう。まずは真水〔のある場所〕を目指すように。高くなった場所で、平坦で土塊がすくない土地に布陣するように。[S: 14] 可能ならば、北を向くように。洪水と夜襲 (dawāhī al-layl) を警戒し、低い場所には布陣しない。

天幕どうしを離しすぎて、大地が兵士たちを支配する (tamliku-hum

26) 塩漬けし乾燥させた肉と肝臓 (al-namaksūd min al-luḥūm wa al-kubūd al-mumallaha)。namaksūdとは、薄切りにしないで乾燥させた肉を意味するペルシア語由来の語であるが、元のペルシア語の単語には「塩漬けた食物」という意味がある [Dozy, v. 2: 734; 新ペルシア語大辞典: 1871頁]。

27) 降伏し (adīllat-an)。S本ではadillat-an (導いて) とあるが、M本に従う。

28) タバリーヤ (Tabariya)。イスラエル北部、ティベリアス湖西岸に位置する街。現在のテヴェルヤ (Teverya)。

29) カウカブ砦 (Hiṣn Kawkab)。ティベリアス湖南方 4 km に位置し、1168年から聖ヨハネ騎士団が保持していた。サラーフ・アッディーンが584/1188年に包囲を開始し、585/1189年に征服した [稀有で至高の書 (6): 73頁; S: 228, n. 6; Le Strange 1890: 483; "Kawkab al-Hawā," EI 2]。

30) 敵との対戦、布陣と戦術的特質 (liqā' al-'adūw wa šifat al-manāzil wa makā'id al-ḥarb)。

al-ardu) ことがないようにする。[そのような状況下で] 敵が軍団のうちの一群を急襲するかもしれない。そうすると、敵は彼らから目的のものを手に入れ、恐怖が残りの軍団を捉え、恐慌が彼らを支配してしまう。また、天幕どうしを近づけすぎて、居場所が狭くなり、休息できない³¹⁾ ことがないようにする。[そのような状況下で] 彼らの中へ火矢が射掛けられるかもしれない。そうすると、[M: 88] 驚きが兵士たちを捉え、不安が彼らを支配してしまう。正円 (dā'irat al-birkār) の3分の2のような形に布陣し、彼らの周りに歩哨 (haras) を置き、尖兵 (yazak) は敵の〔指導者の〕近くに、カザリーヤ部隊³²⁾ は彼の正面に、諜報員は彼の側に置くのである。

敵の兵士たちがその土地に展開できないように、また、馬糧に関して有利になることができないようにする。彼らに対して策略を隠し、罠を仕掛けるように。彼らのアミール、有力者、隊長、総大司教、司祭の言葉にもとづく³³⁾ 文書を捏造するように。そして、それらが読み上げられ、その噂が広まるよう、それらの文書を敵の軍団内で見せるように。そうすれば、必ずやそのことが敵〔の指導者〕に伝えられ、彼の心は側近や兵士に対して怒り狂い、それは真実かもしれないと恐れることになる。たとえそれが真実であると思わなくても、彼は側近や兵士を信用せず、信頼しなくなるのである。そして必ずや、人々の心に傷跡が残されるのである。

たとえ敵がこのようなことを仕掛けてきても、側近や兵士たちに対して心を閉ざさないよう気をつけるように。彼らに対して、同情と好意のみを示すのである。平静を保ちながら恐れる気持ちを働かせるように。恐れている状態にあることは、恐怖に直面するまで安心していることよ

31) 休息できない (lā yanālū al-rāḥata)。S本では動詞がyanābū (代理となる) となっているが、意味が通らないのでM本に従った。

32) カザリーヤ部隊 (al-kazarīya)。読み、語義とも不詳。Sourdelはal-karariyaと読んだうえで、辞書には見られない語であるとし、文脈に即してun groupe d'attaqueという仮訳を示している [S: 229, n. 2]。M本にはal-kazarīyaとあるが、やはり語義を辞書から見つけられなかったと注記されている [M: 88, n. 3]。本訳では、Sourdelの仮訳を参考にして、一部隊の名称であると解釈し、読みはM本に従った。

33) 彼らのアミール…司祭の言葉にもとづく ('alā alsinati umarā'i-him wa akābiri-him wa muqaddamī-him wa baṭāriqati-him wa qusūsi-him)。この部分は、M本では欠落している。

り良いのである。[M: 89]

第15章 機密の秘匿³⁴⁾

スルターンは、諸事について秘匿を心掛けなくてはならない。あることを決意した場合、行動に移すまで、それを語らず、明らかにせず、表に出さないこと。さもなくば、そのことが彼から敵に伝わってしまうかもしれない。そうすると、敵は用心してしまう。また、心の中にあることを言葉として表に出さぬよう気をつけるように。知性ある者は行為に依拠し、無知な者は言葉に依拠するのだ。賢者は「知性ある者の舌はその心にあり、無知な者の心はその口にある」という言葉で真実を語ったのである。[S: 15] たとえ伝えられたこと (atar) を信頼できるとは思わなくとも、情報 (ḥabar) を嘘偽りであると断じないよう気をつけるように。スルターンは、彼の許へ伝えられること、到来することすべてに耳を傾けなくてはならないのだ。否、それが真実であることを明らかにし、それが真実であることを調査してからでなければ、それにもとづいて行動しないことである。[M: 90]

第16章 先遣隊の派遣³⁵⁾

戦争について経験と知識を欠く者を先遣隊として派遣することのないよう用心するように。先遣隊の隊長は、狩猟中に獲物を見つけたならばそれに近づいて襲いかかる³⁶⁾ 有能な狩人のような者であるように。さもなくば、彼は「戦争の経験と知識ではなく」自分の威信を拠り所にして出立し、自分に対する尊敬を拠り所にして出発してしまうのである。また、先遣隊の隊長は、見識と知性、狡知と術策の持主で、側近や軍団の分隊長たちに助言を求め、斥候を派遣し、情報を精査し、陣地を選び、兵団を統御し、軍団を統率する者であるように。彼の言葉は聞き入れられ、彼の命令は背かれず、〔その部隊は〕あたかも一つの身体のように出発し、頑丈な建物のように布陣するのである。

34) 機密の秘匿 (kitmān al-sirr)。

35) 先遣隊の派遣 (infād al-sariya)。S本では一つ目の語が'inqād (救助) となっているが、目次およびM本に従って修正した。

36) 襲いかかる (tarāḥa 'alā)。直訳すると「～に対して投げる」となる。この語句について、al-Murābiṭは ramā-hu wa-qadafa-hu (～に射掛け、〔礮などを〕投げると説明している [M: 90, n. 3]。

588 (1192) 年、私はエジプト軍の先遣隊 (al-sarīya al-miṣrīya) およびサラーフ・アッディーン軍の援軍 (al-nağda al-nāṣirīya) とともに夜間行軍した。彼らをまとめる見識はなく、彼らを抑える隊長も、彼らを押し止める統率者 (zaīm) もいなかった。彼らは布陣すると [M: 91] せき立てられたラクダ (ibil mušammara) のようになり、出発すると驚いて逃げ出すロバ (ḥumur mustanfira) のようになった。彼らは迷う家畜 (aḡnām sā'iba) か偽りの幻影のようでもあった。推測と拙い統率が彼らを導き続け、山裾へ至った。夜明けの星が沈むと、哨兵 (naḍir) が警報を発し、敵の情報をもたらした。多神教徒どもの旗が現れ、先遣隊はばらばらになって進んだ。そして、その情報が広まり話が流布した出来事が生じたのである³⁷⁾。先遣隊の崩壊とは³⁸⁾、深刻な弱点であり、重大な惨事である。[M: 92]

第17章 敵に対する注意と警戒³⁹⁾

敵対者のことを疎かにしないよう気をつけるように。というのも、そのことを疎かにすると、敵対者に対する警戒が薄れ、その結果、敵対者が自分よりも優勢になり勝利するかもしれないからである。そうすれば後悔することになるが、後悔は役に立たないのである。否、常に恐れを抱き、あからさまに用心し、[S: 16] 注意し続けるのである。諺では次のように言われている。

汝の敵や敵対者がいるときは、馬よりも耳を澄まし、鷲よりも目を凝らし、鵠よりも用心し、豹よりも素早く襲いかかり、獅子よりも大胆で、

37) 「その情報が広まり話が流布した出来事」とは、エジプトからエルサレムへ向けて物資を運んでいた隊商を護衛するためにエジプトから派遣された部隊が、フワイリファ (al-Huwaylifa) で野営していたところを、588年6月11日 (1192年6月24日) 早朝にイングランド王リチャード1世 (在位1189–1192年) の軍隊に襲撃された事件を指す [S: 230, n. 1]。山に登って夜営するよう助言があったにもかかわらず裾野で夜営していたため、部隊は大きな被害を受けたとされている [Nawādir: 365–368; *History of Saladin*: 206–208]。フワイリファは、現イスラエル中部の都市ベエルシェバの北北東約16kmに位置する地名 [Abu-Sitta 2010: 530, B–1]。

38) 先遣隊の崩壊とは (inna kasra al-sarīyati)。S本ではinkasara al-sarīyatu (先遣隊が崩壊した) と読めるが、男性形の動詞に女性名詞の主語が続くことになり、文法的に正しくない文となる。ここでは、文法上問題のないM本に従った。

39) 敵に対する注意と警戒 (al-tayaqquz wa al-ihtirās min al-'adūw) : S本ではihtirās (警戒) がほぼ同義の ihtirāz となっているが、目次 [S: 2] と同じ語を用いているM本に従う。

駱駝よりも憎み、蜥蜴よりも忍耐強く、雛に餌を与える雌鳥⁴⁰⁾よりも寛大であれ。[M: 93]

第18章 目標に関する真理への追従⁴¹⁾

自分の心 (nafs) は均整がとれている ('adl) と認識しているならば、すなわち、自分の心は、不本意に真理 (haqq) に追従することなく、真実 (sidq) に助力を求め、欲望に追従せず、虚偽に惹かれないと認識しているならば、望むこと、求める状況を見るように。そして、心がそれに喜んで惹かれるようならば、自分は勝利し敵は打ち負かされると知るように。心に不安と拒絶が見られたら、それには用心し、避けるように。

アレクサンドロス (al-Iskandar) は「私は、自分の心の熟考および心構えとの整合⁴²⁾によって、私が打ち負かすか打ち負かされるかを知ることがない限り、戦いには赴かない」と言った。これには、本章で⁴³⁾本書が提示していること⁴⁴⁾と相反する微妙な言葉が含まれている。つまり、我々の方針は、これとは相反しており、類似していないのである。[M: 94]

第19章 兵員の戦いへの鼓舞⁴⁵⁾

王たる者、御前会議では以下の事柄に関する書物を頻繁に読誦することが望まれる。すなわち、諸々の戦い、ペルシア人の遠征、アラブの戦、シリアの征服、預言者——彼に平安があらんことを——の伝記、騎士たちの戦場、戦術に関する書物を。また、益荒男ぶり (ruġla) で抜きん出て、力強さで知られ、勇敢であると評され、剛勇で部族民を率い、勇

40) 雛に餌を与える雌鳥 (lāfiza)。「子に乳を与える雌羊/雌山羊」という意味もある [Lane: 2667]。

41) 目標に関する真理への追従 (ittibā' al-ḥaqq fī al-maqāsīd)。

42) 自分の心の熟考および心構えとの整合 (wazn nafsī wa i'tilāf i'dādi-hā)。

43) 本章で (fī al-bāb)。M本では、この句と「つまり、…類似していないのである」の一文に相当する部分は、原文ではないとして本文には採録されていない [M: 93, n. 2]。

44) 提示していること ('ard)。この語は、M本では ġaraḍ (目的) となっている。この読みでも意味は通る。

45) 兵員の戦いへの鼓舞 (taḥrīz al-rīḡāl 'alā al-ḥarb)。

気に秀でた者の物語、また、飛び抜けて大胆で、剣で支配し、決意をもって屈服させ、勇敢であるという情報が拡散し、益荒男であるという話が広まり、[S: 17] 女達が彼の話語り、馬乗りが彼の伝記運び〔広め〕、仲間たちが彼を称えて歌い、遠隔の地〔の人々〕が彼のために声をあげ、人々の心が彼を恐れ、イマームと司祭が畏怖した者の物語の書物を。

たとえば、神の使徒——神が彼に祝福と平安を与えんことを——の後継者アブー・バクル・スィッディーク⁴⁶⁾——神が彼に満足せんことを——とその数々の分遣隊〔の派遣〕、信徒の長ウマル・ブン・アルハッターブ⁴⁷⁾ [M: 95] と彼の数々の征服、信徒の長ウスマーン・ブン・アッファーン⁴⁸⁾ と彼のカリフ在位期に征服されたもの、信徒の長アリー・ブン・アビー・ターリブ⁴⁹⁾ と彼の数々の戦。また、ハーリド・ブン・アルワリード⁵⁰⁾、アブー・ウバイダ⁵¹⁾、ミクダード⁵²⁾ など、優れた教友たち——神が彼らに満足し、彼らを満足させんことを——の物語、ムスリムの勇者達と一神教徒達の諸軍団がおこなった著名な遠征と戦の物語。また、アムル・ブン・マァディー・カリブ⁵³⁾、アンタラ・アブスィー⁵⁴⁾、アムル・ブン・ワッド・アーミリー⁵⁵⁾ についての伝承。また、[M: 96] 戦いで屈服し、刺したり切りつけたりする戦場で怖じ気づき、力が萎え、

46) アブー・バクル・スィッディーク (Abū Bakr al-Ṣiddiq)。初代正統カリフ (在位11-13/632-634年)。

47) ウマル・ブン・アルハッターブ ('Umar b. al-Hattāb)。第2代正統カリフ (在位13-23/634-644年)。

48) ウスマーン・ブン・アッファーン ('Utmān b. 'Affān)。第3代正統カリフ (在位23-35/644-656年)。

49) アリー・ブン・アビー・ターリブ ('Alī b. Abī Ṭālib)。第4代正統カリフ (在位35-40/656-661年)。

50) ハーリド・ブン・アルワリード (Ḥalīd b. al-Walīd)。イスラーム草創期の軍人。当初はメッカ軍の指揮官として活躍したが、メッカ征服前に改宗した。その後、数多くの軍功をあげ、「神の剣」という異名でも知られる。21/641-42年没 [「ハーリド・イブン・ワリード」『岩波イスラーム辞典』]

51) アブー・ウバイダ (Abū 'Ubayda)。ヒジュラ以前に入信した教友の一人。軍人として活躍し、ビザンツ帝国軍を破ったヤルムークの戦い (15/636年) に参加した。その後、指揮官に任じられシリア全土を征服した。18/639年没 [「Abū 'Ubayda b. al-Jarrāh, EI 3」]。

52) ミクダード (al-Miqdād)。ヒジュラ以前に入信した教友の一人で、ムハンマドに仕えた射手としても知られる。シリア征服にも加わった。33/653-54年没 [「al-Miqdād b. 'Amr, EI 2」]。

両手が震え、恥をかき、不名誉が残った者の物語である。

以上のことは、兵員たちを敵に立ち向かうよう促し、臆病な者に勇敢さを与え、弱い者を力づけ、彼らに自尊心を持たせるのである。[M: 97]

第20章 戦列への打撃と戦術⁵⁶⁾

敵と対戦しその戦列に打撃を与えようとするときは、太陽が敵の目に入り、風が彼らに向かって吹くよう努めるように。もしも、敵がこちらに対してそのようなことを仕掛け、こちらがその場所から撤退すること、幕営地から撤収することも不可能にした場合は、状況がこちらに有利になり、敵には不利になるよう、軍団を率いて堂々と進軍するように⁵⁷⁾。臣下たちが略奪に熱中し、獲物の獲得に惑わされることのないよう、彼らに「敵の」戦略を恐れさせ、策略に用心させるように。敵が彼らの許へ戻ってくるかもしれないし、伏兵が攻め出てくるかもしれない。そうなると、敵が彼らを捕らえ、捕虜とし、滅ぼすことになる。

旗を広げ、小太鼓を叩き、喇叭を鳴らし、タブル⁵⁸⁾とナッカーラ⁵⁹⁾の音で敵の心胆を寒からしめるように。軍隊や寄せ集められた兵員や [M: 98] 役に立たない群衆の多さに驚かされないように。このような者たち

53) アムル・ブン・マァディー・カリブ (‘Amr b. Ma’dī Karib)。イエメン出身の詩人かつ戦士として知られる人物。ムハンマドの晩年に入信したものの、その没後に背教者の反乱に加わった。反乱が鎮圧された後、ムスリム軍に加わり、ヤルムークの戦いやカーディスィーヤの戦い(15/636年頃)で戦功を挙げたと伝えられる。没年については複数の説があるが、ニハーワンドの戦い(21/642年頃)で負った傷が原因で没したという説がもっとも有力とされる[“‘Amr b. Ma’dīkarib,” EI 3]。なお、S本では名前の末尾のKaribが欠けているが、M本に従って補った。

54) アンタラ・アブスィー (‘Antara al-‘Absī)。ジャーヒリーヤ時代の詩人にて戦士として知られる半ば伝説的な人物。アブス族の父と黒人奴隷の母の間に生まれたとされる[“Antara,” EI 3]。

55) アムル・ブン・ワッド・アーミリー (‘Amr b. Wadd al-‘Āmirī)。ジャーヒリーヤ時代のクライシュ族の戦士。塹壕の戦い(5/627年)において、アリー・ブン・アビー・ターリブに討ち取られて没したと伝わる[M: 95, n. 5; S: 232, n. 6; *al-Ya’qūbī*, v. 2: 50]。

56) 戦列への打撃と戦術 (darb al-maṣāff wa makā’id al-ḥarb)。

57) 軍団を率いて堂々と進軍するように (fa-l-yazḥaf bi-al-‘askari ‘arḍan)。

58) タブル (tubūl)。筒形太鼓。本文中の語は複数形。単数形はtabl。

59) ナッカーラ (naqqārāt)。釜形太鼓。本文中の語は複数形。単数形はnaqqāra。

は真っ先に敗走するものであり、このような性質の軍隊が勝利したことはほとんどないからである。

目標⁶⁰⁾は自分自身で定め、他人に頼らぬように。至高なる神への信頼を前面に据えるように。中軍を整え⁶¹⁾、その兵員を増強し、勇者を選ぶように。[S: 18] それが〔敵の攻撃〕目標かもしれない。右翼には、頼りにし信頼する者たちを配置するように。左翼も同様である。両側面を統制し、両翼を整えるように。軍団のうち、戦略を実見し、刺したり切りつけたりする醍醐味を味わった兵員の残り⁶²⁾と勇者の一团を残しておくように。

敵側からの攻撃がどの方面へ向かうのか、それがどの部隊を目指しているのかをよく見るように。その攻撃が右翼からのものであれば、〔自軍の〕左翼を増員するように。左翼からのものであれば、〔自軍の〕右翼を強化するように。〔敵に〕目指されている方面、迫られている部隊へ、高名な兵員と名高い勇者の中から、よく知られかつ益荒男ぶりを評される者たちを向かわせるように。〔敵の〕関の声、勝利の雄叫び、叫び声の多さに、用心するように。それらは、萎縮、不快、倦怠、弱体、脱力を引き起こすからである。[M: 99] 常に、彼らに戦争を畏怖させ、勇敢さを名誉とさせ、最初の一撃に対して踏みとどまらせるように。最初の一撃で、勝者がわかり敗者がはっきりするのである。

歩兵、弓射手、火炎放射手、槍兵は、騎兵隊の前を進ませるように。敵の軍団の隊長たちをよく見るように。彼らと対面して⁶²⁾、優れた兵員たちと騎士たちを、すべて互角の者どうし、好敵手どうしとなるよう、配置するように。〔敵軍の〕者どもが彼らを頼りにしており、彼らを注視していることを知るように。彼らが崩れたならば、残りの者は抵抗しない。それどころか、〔敵にとって〕害悪となり、役に立たなくなる。

王は、敵の軍団が自分に向かって進軍し、攻撃してきた際には、それ

60) 目標 (atlab)。本文中の語は複数形。単数形は tilb。Sourdel-Thomine は les bataillons (大隊) と訳し、根拠として Dozy の当該項目を挙げている。単数形は tulb で、アイユーブ朝時代にエジプト・シリアで用いられるようになったクルド語起源の軍事用語とされている [S: 233, n. 1; Dozy, v. 2: 51]。

61) 中軍を整え〔るように〕 (li-yu'abbi' al-qalba)。「整える」と訳した下線部の語は、S本では yu'abbi (呑み込む) となっているが、M本の読みに従った。

62) 彼らと対面して (tuḡāha-hum)。S本では tuḡāha-hu (彼と対面して) となっているが、M本に従って読む。

をよく見るように。どの方向に欠点があるか、どの方面に弱点があるかを見て取ったならば、そこへ攻撃を仕掛け、兵員を送り込むように。そして、その方向の敵が震え慄き、恐れ、混乱したならば、すかさず一撃を与え、打撃によってその方面を粉碎するのである。さらに、彼らが弱体化し、向きを変え、敗走したならば、[M: 100]〔自軍の〕隊長たちと戦士部隊を呼び、敗走者たちを追撃させるように。これに加えて、王の背後で、伏兵が事態の真相を見るようにし、自身を危険にさらさないように。彼は〔いわば〕元本であり、元本を守る者は破滅しないのであるから。剛勇、勇気、力、力強さを備えた民の一团を伴うように。アラブの駿馬とキラーブ族の若駒⁶³⁾を連れて行くように。

さて、敵を粉碎し、その兵員たちを捕らえ、勇者を殺害した際に、もし、敵を支配しその王国を手に入れることを欲するのであれば、ただちにそこへ向けて出発し、その国に対して布陣し、敵たちが警戒し、用心し、注意する時間を与えないように。否、軍隊で彼らを急襲し、軍団で彼らにうち勝つのである。そうすれば、彼らの地方を支配し、彼らの痕跡を根絶することになるかもしれない。また、捕らえられた高名なアミールたちを連行するように。そして、彼らを見せしめとし、彼らに枷をつけて、彼らを伴って、[S: 19]〔攻めるのが〕難しい城塞や〔攻撃が〕困難な場所を征服するのである。彼らを釈放し後悔することのないように。彼らの害悪から安全になるのは、彼らがムスリムになり、神の信徒になる場合のみである。そうなれば、彼らに王自身に対する誓いを立てさせたうえで、彼らに恩恵を与え、彼らを厚遇して釈放し、恩恵を与えることで彼らを支配するのである。そうすれば、彼らは〔敵国の〕民とその国の未征服地に対する王の〔支配の〕助けとなるだろうし、以上のことは、口の端に上り、各地に伝わる話として広まることになるであろう。

63) キラーブ族の若駒 (al-amhara al-kilābīya)。キラーブ族は、シリアに存在していた有力なアラブ部族の一つ。11世紀にアレppoを首都とする王朝を建てたミルダース家は、キラーブ族に属していた [“Mirdās, Banū or Mirdāsids,” EI 2]。

文献および略称

辞典類

大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年。【岩波イスラーム辞典】

黒柳恒男『新ペルシア語大辞典』大学書林、2002年。【新ペルシア語大辞典】

Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Supplément aux dictionnaires arabes*. 2 vols.

Leyde: E. J. Brill, 1881. Beyrouth: Librairie du Liban, 1981. 【Dozy】

Gaborieau, Marc, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam, Three*. Leiden: Brill, 2007-. 【EI 3】

Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12 vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960–2009. 【EI 2】

Lane, Edward William. *Arabic-English Lexicon*. 8 vols. London, 1863–1893.

Revised ed. 2 vols. 1984. Cambridge: The Islamic Texts Society, 2003.

【Lane】

Steingass, Francis. *A Learner's Arabic-English Dictionary*. 1884. Beirut:

Librairie du Liban, 1978. 【Steingass A】

Steingass, Francis. *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. London,

1892. New Delhi: Munshiram Manoharal Publishers, 2000. 【Steingass P】

『ハラウィーの戦略論』校訂・翻訳

al-Taḡkira al-Harawīya fī al-ḥiyal al-ḥarbīya. Ed. Muṭī' al-Murābiṭ. Dimašq:

Wizārat al-Taḡāfa wa al-Iršād al-Qawmī fī al-Ġumhūrīya al-'Arabiya al-Sūrīya, 1972. 【M】

“Les conseils du Šayḥ al-Harawī à un prince ayyūbide.” Ed. and trans. Janine

Sourdel-Thomine. *Bulletin d'Études Orientales* 17. Institut Français de Damas, 1962, pp. 205–266. 【S】

*校訂テキストは解題・翻訳とは逆順（右始まり）で収録されている〔pp. 242–266〕。本稿でテキストの頁を示す場合は、テキスト部分に付された逆順頁番号（1–25）を示す。

「タキー・アッディーン・アリー・ブン・アビー・バクル・ハラウィー著『ハラウィーの戦略論』訳注（1）」谷口淳一訳『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編』23号、2024年：1–16頁【ハラウィーの戦略論（1）】

その他の一次文献

Ibn Šhaddād, Bahā' al-Dīn Yūsuf b. Rāfi'. *al-Nawādir al-sulṭānīya wa al-maḥāsīn al-yūsufīya*. Ed. Aḥmad Ībiš. Dimašq: al-Awā'il, 2003. 【*Nawādir*】
バハー・アッディーン・イブン・シャッタード 『サラディンの稀有で至高の
書』 —その 6— 松田俊道 訳『史学』69号、中央大学文学部、2024年：
61–87頁。【稀有で至高の書（6）】

Ibn Šhaddād, Bahā' al-Dīn Yūsuf b. Rāfi'. *The Rare and Excellent History of
Saladin*. Trans. Donald Sidney Richards. Aldershot et al.: Ashgate, 2001.
【*History of Saladin*】

al-Ya'qūbī, Aḥmad b. Abī Ya'qūb. *Tārīḥ al-Ya'qūbī*. 2 vols. Bayrūt: Dār
Šādir, n. d. 【*Ya'qūbī*】

研究

アルハサン、アフマド Y.・ヒル、ドナルド R.『イスラム技術の歴史』多田博
一・原隆一・斎藤美津子訳、平凡社、1999年。【アルハサンほか1999】
平田昌弘『西アジア・シリアの食文化論』農山漁村文化協会、2022年。【平田
昌弘2022】

Abu-Sitta, Salman H. *The Atlas of Palestine, 1917-1966*. London: Palestine
Land Society, 2010. 【Abu-Sitta 2010】

Le Strange, Guy. *Palestine under the Moslems*. Boston and New York, 1890.
New York: Ams Press, 1975. 【Le Strange 1890】

Nicolle, David. *The Military Technology of Classical Islam*. 3 vols. Diss. The
University of Edinburgh, 1982. 【Nicolle 1982】

※【 】内は略称。